

□ 次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（設問の都合上、本文に一部表記を改めたところがあります。）

日本人は井物が大好きである。天井、かつ井、うな井。近ごろは※趣向を凝らしていくら井などというものもあるらしい。

さてその井には二つの等級があつて、松、竹、梅と名づけられる。ふつうはこの順序に値段が下がるのかと思つたら、ある店のうな井は松が二〇〇円、竹が一八〇〇円、梅が二四〇〇円だった。梅が松のバイだというだけじゃれでもあるまいに。

それはともかく、竹はいつも中ほど。そこで聞くところによると、圧倒的によく出るのは竹だそうである。要するに①井屋の客は、まん中の井をよく注文するらしい。

なるほど、それがa無難だろう。

いつもいつも特上の寿司しか食べない男は、ちよつと※胡散くさいと警戒されかねない。ことわざにも「A」というものがある。何事にも目立つと人の※そねみを買ひ、ろくなことはない。

反対に、いつもいつも下等のものばかりを食べていると、人から※さげすまれる。これまた目立つて、あいつは貧乏だとレッテルをはられる。そこで少々我慢をしても、竹を注文することになる。

何しろ、人並みにしておけば問題ないのである。少しでも他人と違つていると、とかく「あいつは変わり者だ」ということになり、仲間はずれにされてしまう。

だから等級ばかりか、注文する品物まで他人と違うものは、注文するのにも勇気がいる。仲間がビフテキを食べたいという時に、オレは刺身だといひ張る男がいるともコマる。だから多少食べたいものが違つても皆がビフテキが食べたいと言えどOKし、席につけばグラム数まで同じ、焼き方もミディアムと言つておけば仲好しでいられる。□

B、外国のレストランでは二人目以下の日本人は、すべてウェイトレスに「※セーム」「セーム」と注文することになる。その結果、「②日本人はセームという料理を發明した」などとかからかわれる結果となる。

要するにセームとは、竹のことなのである。

竹の思想は料理だけではない。シカタなく寄付するときは、右左の人の額を聞いて、ほどよくバランスを保った金額にする。多ければ※傲慢だといわれ、少なければケチだといわれる。

③寄付にまで、竹の思想が生きている。

さてそうなると、日本人にはまるで個性がないということになる。反対にいちいち、いちばんうるさい外国人はドイツ人ではないか。風呂に入る時まで温度は何度がいいかと聞く。確かに熱め、ぬるめと好みは日本人にもあるし、ましてや血圧を心配している人にはぜひ適温が必要だろうが、ふつうの時なら④ほどの熱さの湯でいいではないか。

しかしそんなことを言うと、日本人は個性がないと言われる。※ケゲンな顔ならまだしも、バカにされることもある。

そこで文明開化の波の中で、明治時代の※先覚者たちは、この日本人の文明度の低さを嘆いた。何とかしようと考えた。

その結果、近代日本の合ひことばが「自我の確立」ということになった。

学校でもいつせいに、個性教育をdカンパンにかかげるようになった。「よい子」はのびのびと※ディベートでも独自の意見を述べて、堂々と勝利をおさめる子である。

ここでも、⑤竹組はコソコソと尻っぽを巻いて逃げるしかない。

もう日本人は、ほんとうにどうしようもない劣等民族である。少しは俺たちのように欧米人の教養を身につけたらどうだ、と先覚者から

叱られる。

(中西進 「日本人の忘れもの2」)

※趣向：おもむきやおもしろみを出すための工夫。

※胡散臭い：なんとなく疑わしい。信用できない。

※そねみ：他人をうらやましく思い、その分にくらしく思う感情。

※さげすむ：自分より劣つたものとして人を見下す。

※セーム：「same」のことで、同じものという意味。

※傲慢：おごり高ぶつて人を見下すこと。

※ケゲン：不思議で納得いかない様子。

※先覚者：人々より先に道理を悟る人。

※ディベート：あることについて、異なる意見を持つもの同士が意見の正当性を議論しあい、勝敗を第三者が判定すること。

問1 aとdの漢字には読みがなをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

a	b
c	d

問2 ①「井屋の客は、まん中の井をよく注文する」とありますが、これはどう考えるからですか。それが現れている一文を五十文字以内で本文中から探し、初めの五字を抜き出して答えなさい。

--	--	--	--	--

問3 Aに入ることわざとして適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア	出る杭は打たれる	
イ	後悔先にたたず	
ウ	やぶから棒	
エ	長いものにはまかれよ	

問4 Bに入る言葉として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア	しかし	
イ	たとえば	
ウ	または	
エ	そこで	

問5 ―②「日本人はセームという料理を発明した」という言葉には、どんな気持ちが入められていますか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 共感
イ 皮肉
ウ 反感
エ 尊敬

問6 ―③「寄付にまで、竹の思想が生きている」とありますが、どのように寄付をすることを指していますか。本文中の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。

問7 ―④「ほどほどの熱さ」とありますが、ここではどんな温度のことですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かなりぬるめの温度。
イ 普通より少し熱めの温度。
ウ その人の好みの温度。
エ 熱くもぬるくもない温度。

問8 ―⑤「竹組」とありますが、これはどういう子のことを指していますか。「個性」という言葉を用いて二十字以内で答えなさい。

② 次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（設問の都合上、本文に一部表記を改めたところがあります。）

小学校五年生の健は、理由はわからないが、水がこわくて、プールに入ることができなかった。一つ違いの姉の裕美がなにかにつけて健につらくあたり、けんかが絶えなかった。姉は何も知らずにいる健がゆるせなかったのだ。ある日、いつものように言い争っていたときに、ふともらした言葉がきっかけになって海での事故のことを思い出す。そして、両親も姉も、事故のことを覚えていない自分には何も知らせなかったことを知った。姉とも理解し合えるようになり、水がこわいという理由がわかった健は、友人の光男が通っている水泳教室にやって来た。

光男は掲示板の※縁石に、バッグを下ろした。それからゆっくり顔を上げたとき、その目を見たこともないほど、きまじめな色をたたえていた。

「①健、きいても……いいかな？」

「ん？」

健は A 、身がまえていた。

「おまえさ、学校のプール……入ったことないじゃん。どうして？」

あ、あの……答えたくなければ、答えなくてもいいんだけどさ。」

健はうつむいたまま、何度もうなずいた。

（②打ち明けよう、そのほうがいい。）

でも、ことが出てこない。のどがひくひくしている。

光男はじつと健を見つめ、こんどこそがまん強く待っていた。待っていてくれた。

「うち……とうさん、足が悪いだろ。」

ようやく、消えいりそうな声が出た。

「ぼくのせいなんだ。ぼくのせいで、とうさん、ケガしたんだよ。ぼくがふざけて海に落ちたのを、助けようとして。それで、とうさん、事故にあったんだ……」

それしかいえなかった。

長いちんもくがあった。

やがて光男は、「③きつつう……」とうなりながら縁石にすわりこんだ。

「そいつは……なんていうか……きつすぎだよな。」

「でも、④もうクリアした。たぶん……」

それとさ、運動会の前からぼく、シラケてたじゃん。あれも、そのことでのいろうあつたんだ。それで……正直いうと、おまえたちみんな、すぐガキに見えちゃったんだ。」

「そっか……。なんかわけありだと思った。ま、いいよ。おれたたちのことなんか。」

「あのさ……かんかん照りのプールサイドは、もううんざりなんだ。練習してみるよ、プール。だから申込書、もらってきてくれない？ もちろん、光男の紹介ってことで入会するからさ。」

ねえ、きょうは、もう行ったほうがいいよ。時間だろ。教室に遅れちゃうよ。」

「う、うん。」

光男は立ち上がった。でも、水泳バッグを道路に引きずったまま、まだぐずぐずしていた。

「健、あのう、ありがとな。」

「えっ？」

「話してくれてさあ。ほんとはきいてみたかったんだ。どうしてプールに入らないのか……。でも、やっぱ、きけないじゃん。」

「きいてもむだだったよ。ぼくだって、思い出したばかりなんだから。」

光男は B があくほど健の目を見つめた。

けど、もうなにもたずねなかった。かわりに、ふうっと息をはくと、話題を変えた。

「おれ、プールでも⑤顔なんだ。まかせとけて。ちゃんと面倒みてやるからさ。」

健はもうなにもいえなくて、思わず光男の胸をプールのドアのほうへ、ぐいぐいおしえていった。すると、光男は二倍の力で、健の胸をぐいぐいおしえてきた。健は意地になって、そのまた倍の力でおしかえた。

⑥しばらくの間、ふたりはことばもなく、むきになっておしくらまんじゅうを続けていた。

※緑石：通路の両側や花壇との境に置くブロックや石。

問1 ―①「健、きいても…いいかな？」とありますが、ためらいがちにたずねているのは、どんな思いがあったからですか。適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 答えたくないかもしれないという思い。
イ 答えを知らないほうがいいという思い。
ウ 予想外の答えだったら困るという思い。
エ 健にきられるかもしれないという思い。

問2 A に入る言葉として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア かさねがさね イ のらりくらり
ウ 知らず知らず エ おそろおそろ

問3 ―②「打ち明けよう」とありますが、どんなことを打ち明けようとしたのですか。それを説明した次の文の（ ）に入る内容を四十文字以内で答えなさい。
・ぼくがブルーに入らないのは（ ）がきっかけだったということ。

問4 ―③「きつつう…」という言葉に光男が込めた意味として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 健を責めずにいた健のおとうさんはすごい人だなあ。
イ 今聞いた話を自分の心におさめておくのはつらすぎる。
ウ まったく想像していなかったことでびっくりしたよ。
エ とんでもなく大変なことを背負っていたのだなあ。

問5 ―④「もうクリアーした」についてあとの問に答えなさい。
(i) 「クリアーした」とはどういう意味ですか。カタカナの言葉を使わずに言いかえなさい。

(ii) 「クリアーした」ことによってしようとしていることは何ですか。本文中の言葉を使って二十文字以内で答えなさい。

問6 B に入る言葉を漢字一字で答えなさい。

問7 ―⑤「顔なんだ」とありますが、この部分をわかりやすく言いかえなさい。

問8 ―⑥「しばらくの間、おしくらまんじゅうを続けていた」とありますが、このときの様子として適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 重大なことを共有した二人の気持ちが通い合っている様子。
イ 健の話を聞いたあとも友達でいられるか確かめている様子。
ウ 水泳教室を休んでいっしょにいようと健に伝えている様子。
エ 長い間いなかったことを話して健の心も明るくなった様子。

問9 次の①～③の文の―線部分のうち、一つだけ文法的な用法の異なるものがあります。それぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① ア チューリップの花が咲かない。
イ 私はすでに若くない。
ウ 食べたものはいい。
エ 分からないことばかり言うなよ。

- ② ア 誰も思いつかないようなアイデアを発表するとよい。
イ 夏の雲のように不安が胸中に広がりはじめた。
ウ 道に迷うようなら学校に連絡する。
エ 私は彼女のようにやさしくなりたい。

- ③ ア にぎやかな季節がまたやって来る。
イ 試験勉強は理科も終え、また社会も終えた。
ウ 走り疲れたのに、また走らされた。
エ この海辺の町にまた来ることはないだろう。

問10 次の①～⑤は「舌」を使った慣用句である。句の意味として適切なものを、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 舌が肥える ② 舌がすべる ③ 舌を巻く
④ 舌を出す ⑤ 舌が回る

- ア うっかり言っではならないことを言う
イ よどみなくしゃべる
ウ 陰で他人をばかにする
エ 味のよしあしがわかる
オ 感心して言葉がでない

③			
④		①	
⑤		②	